

「海なし県」の 海の民話

富士川がつないだ海とまち

取材・文
東田純奈

協力
深澤五月(富士川町教育委員会生涯学習課)
深澤富男・石坂喜美子(富士川町歴史文化館塩の華 ボランティアガイド)



海なし県である山梨県には「まりつき唄」という「海の民話」が伝わっている。なぜ海なし県に、海の民話があるのだろうか？ そこにはかつて海と内陸をつなぐ物流の要として栄え、町に繁栄をもたらした富士川の存在がある。

日本には「海なし県」が八つある。

海なし県とはその名のとおり、海に面していない県のことである。山梨県は、そんな海なし県のうちの一つだ。中部地方に属し、西側には南アルプスが、南側には富士山がある。最も近い海は静岡県に面する駿河湾で、県境から約20キロメートル離れている。

急流・富士川

山梨県に伝わる「海の民話」に「まりつき唄」という話がある。

——甲州（現在の山梨県）の呉服屋に仲のいい姉妹がいた。ある年、豊年を祝って二人で身延山詣さんでに出かけることになった。

舟に乗り込んで向かうものの船頭は不慣れなのか、手つきがぎこちない。1里半（約6キロメートル）ほど進んで「ここはあぶない天神ヶ滝よ」と言う船頭に、「いますぐ舟をとめて」と必死で頼むも、舟は波にのまれ、姉妹は川に投げ出され

てしまう——。

「まりつき唄」の舞台は、山梨県南部に位置する富士川町だ。山に囲まれた自然豊かな町で、町の東側を富士川が流れる。富士川は南アルプスののこぎりだけ鋸岳を源流とし、静岡県に面する駿河湾に注ぐ。この川ではかつて多くの舟が行き来し、町にさまざまな恵みをもたらした。日本三大急流の一つでもあり、「アクバ（悪場）」と呼ばれる難所がいくつもある。「アクバ」こそ、「まりつき唄」で船頭が恐れた命がけの難船ポイントのことだ。

そんな富士川しゅうらんの舟運は、京都の角倉了すみのかくりょうい以という豪商によって江戸時代に開削された。“富士川開通”は物流に大きな変化を引き起こした。徒歩で2日かかっていた道のりが、舟なら6時間で移動できるようになったのだ。1頭の馬で2俵しか運べなかった荷物も、1艘の舟なら32俵運べるようになるなど、舟運の開通は物流に革命をもたらした。

川なのに「海の民話」

「まりつき唄」の話は、一般社団法人日本昔ばなし協会が推進する「海ノ民話のまちプロジェクト」においてアニメ化された。

このプロジェクトは、海にまつわる「民話」や「伝承」をアニメーションとして表現することで、日本の「海とのつながり」や「地域の誇り」を子



今は穏やかな富士川。



「アクバ」の一つ、天神ヶ滝。



「塩の華」では実際の舟に乗って映像を観覧できる。



上から見ると桔梗の形をした俵。塩を詰めて馬に運ばせた。

どもたちに伝え、語り継ぐことを目的としている。

しかし、「まりつき唄」の舞台は海ではなく、川。なぜアニメ化されたのだろうか。そこには富士川町歴史文化館「塩の華」の設立と深い関係がある。富士川町教育委員会生涯学習課の深澤五月さんと、「塩の華」のボランティアガイドの深澤富男さん、石坂喜美子さんに話を聞いた。

「塩の華」は令和5（2023）年に設立された、富士川町と関わり深い人物や町の舟運の歴史を紹介する施設である。「塩の華」をつくるにあたり、若い世代にも舟運の歴史に興味を持ってもらうため、アニメーションの題材を探していたときに「まりつき唄」を偶然発見したそうだ。

「それまでまりつき唄のことは知っていましたか？」と聞くと、「実はアニメーションを作るときに初めて知りました」という回答が3人からあった。町民に広く知られていたというよりも、知る人ぞ知る、といった民話だったようだ。

「塩の華」という館名は、舟運が盛んだった当時、最も重要な積み荷の一つであった「上げ塩」によって栄華を誇った富士川町を表現しているという。上げ塩は、海から川を上って運ばれることからその名がある。反対に川を下っていくのは年貢米で

あり、「下げ米」と呼ばれた。「塩の華」と「まりつき唄」は、海のない山梨県が富士川舟運を通じて得た海とのつながりについて伝えている。「まりつき唄」は確かに海そのものを舞台にした民話ではない。しかし、海に「つながる」・海と「つなぐ」場を舞台にしたという点で、海の民話として読み解くことができるのだ。

海が好き

山梨県に住む人々は「海」のことをどう思っているのだろうか。

石坂さんは「海は好きですし、海に行きたいという気持ちがあります。山梨県にないからこそ広大な海に憧れます」と海への思いを語る。

富士川舟運は鉄道の登場により衰退していく。しかし「まりつき唄」が舟運の歴史について、今を生きる私たちに伝えてくれている。人々は「まりつき唄」を通して、舟運によってつながれた海へ思いを馳せることができるのだ。

海のない県で、海の民話を語りつないでいくということ。そこには、海なし県に住む人々の海への思いを膨らませる意義があるのだろう。🌀